



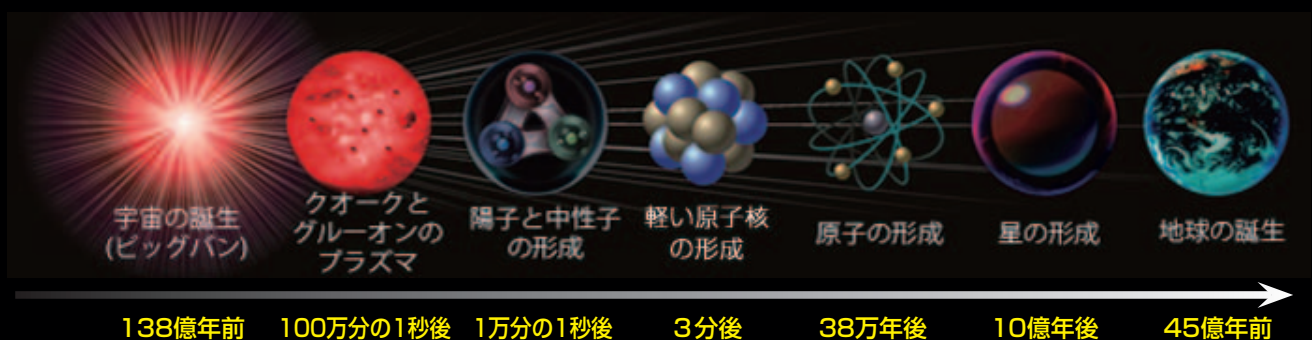
J-PARC

Japan Proton Accelerator Research Complex

大強度陽子加速器施設

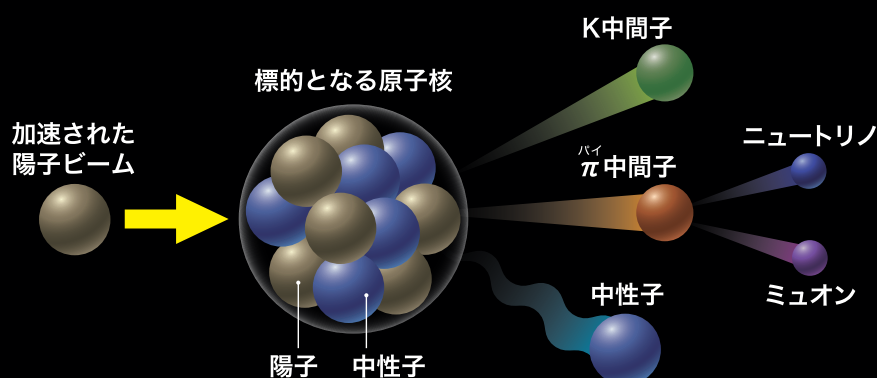


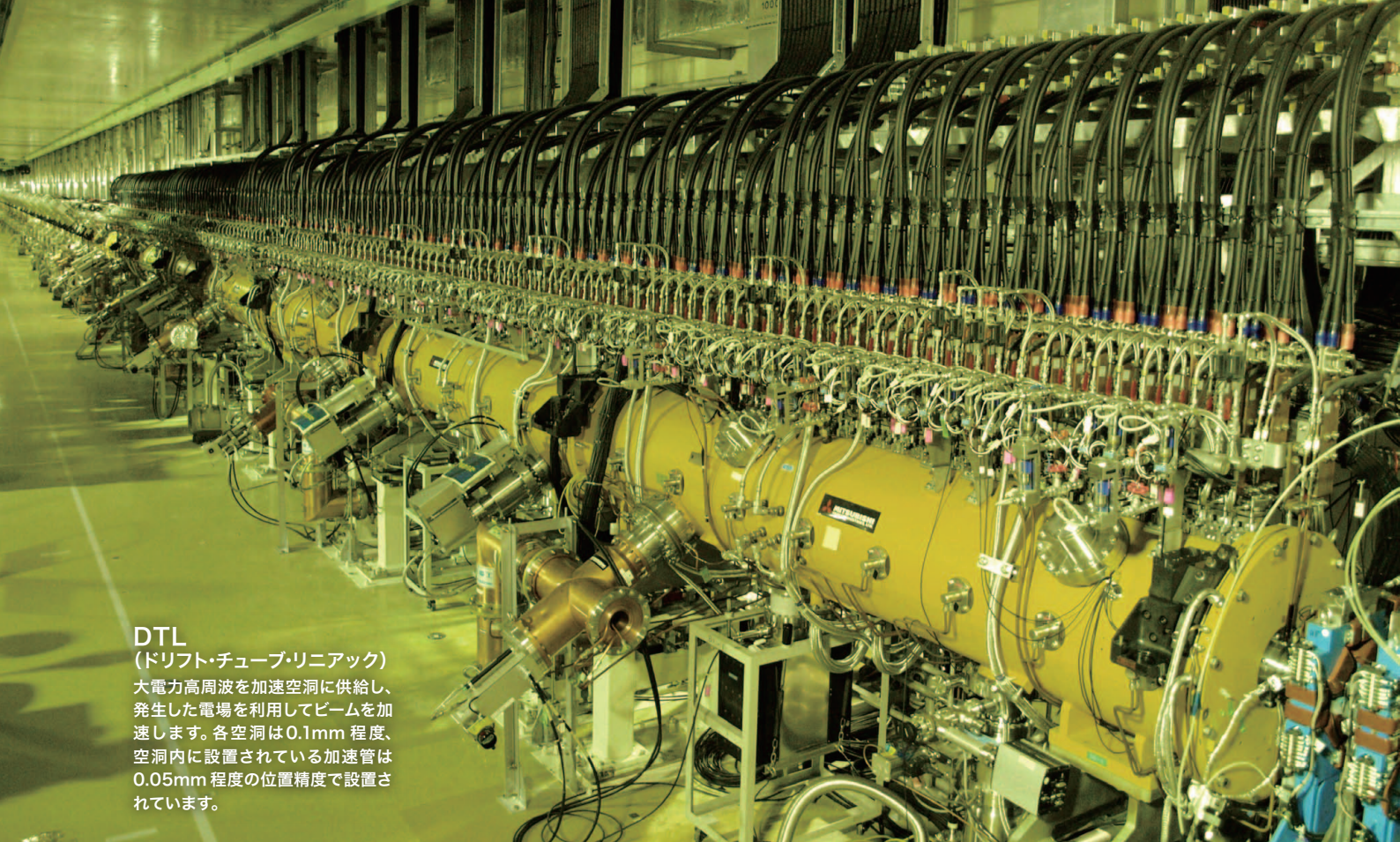
宇宙・物質・生命の起源に迫る 大強度陽子加速器施設 J-PARC





陽子ビームから作り出される多彩な二次粒子ビーム





DTL

(ドリフト・チューブ・リニアック)

大電力高周波を加速空洞に供給し、発生した電場を利用してビームを加速します。各空洞は0.1mm程度、空洞内に設置されている加速管は0.05mm程度の位置精度で設置されています。

リニアック

(直線型加速器)

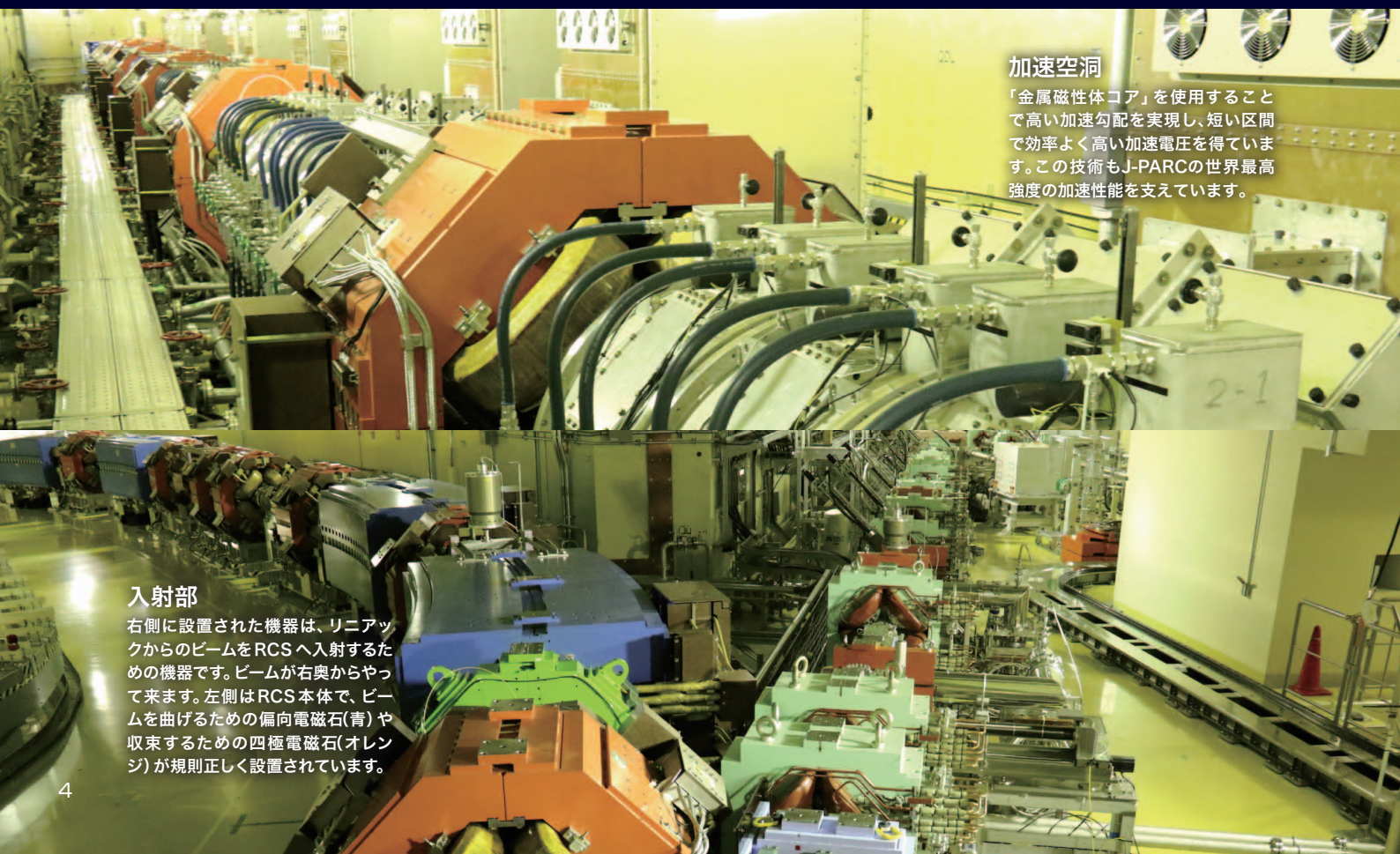
全長約 330m

RCS

(3GeVシンクロトロン、周回型加速器)

周長約 350m

リニアックで加速された負水素イオンは、周回型加速器である 3GeVシンクロトロン(Rapid-Cycling Synchrotron, RCS) に入ったところで、炭素の薄膜をくぐり、2個の電子がはぎ取られ、陽子になります。陽子ビームは、1台数トンから数十トンにもなる大きな電磁石約 160 台によって、曲げられたり、収束されたりしながら、加速器の中を 1 万回以上回り、そのエネルギーは最終的に 3GeV (速度にして光速の 97%) にまで達します。RCS の加速空洞は、独自に開発された優れた性能を持ち、J-PARCの世界最高強度の加速性能を支えています。RCS で加速された陽子ビームのほとんどは、物質・生命科学実験施設に送られて実験に利用され、残りは MR (主リング) に送られます。



加速空洞

「金属磁性体コア」を使用することで高い加速勾配を実現し、短い区間で効率よく高い加速電圧を得ています。この技術もJ-PARCの世界最高強度の加速性能を支えています。

入射部

右側に設置された機器は、リニアックからのビームをRCSへ入射するための機器です。ビームが右奥からやって来ます。左側はRCS本体で、ビームを曲げるための偏向電磁石(青)や収束するための四極電磁石(オレンジ)が規則正しく設置されています。

実験施設を支える J-PARCの加速器群

J-PARC は、陽子を加速する 3 台の大型加速器を持っています。陽子が数兆個から数十兆個もの塊となった陽子ビームは、加速空洞というビームを加速する装置や、何百個もの電磁石に挟まれた細いパイプの中を通過しながら、光速の 99.95%※まで加速されます。陽子ビームが空気中の酸素や窒素分子に邪魔されずに真っ直ぐに進めるように、パイプの中は、宇宙空間と同じくらいの真空状態を実現しています。

J-PARC の加速器は、日本の高い技術力で作られた超精密な電気機械であり、世界最高強度の高エネルギー陽子ビームを作りだすことができます。

※ 30GeV に対応。3GeV では 97.12%。

MR

(30GeV主リング、周回型加速器)
周長約 1600m

たくさんの二次粒子を使うので、数十 GeV のエネルギーの陽子ビームが必要な素粒子・原子核実験のためにビームを加速する周回型加速器で、直径約 500m の我が国最大の陽子加速器です。MR は電磁石の組み合わせを工夫してビームのロスを抑える世界初の設計を採用しています。周回型加速器の中を約 30 万回も回る間に、陽子ビームのエネルギーは 30GeV、速度は光速の 99.95%にまで達し、ハドロン実験施設とニュートリノ実験施設に導かれます。

偏向電磁石(青)と 四極電磁石(黄)

陽子の進行方向を曲げる偏向電磁石と、ビームを収束させるための四極電磁石。電磁石の組み合わせを工夫することで、ビームのロスを抑える設計を世界で初めて採用しています。

ニュートリノビームライン分岐付近の 偏向電磁石(橙)と四極電磁石(黄)

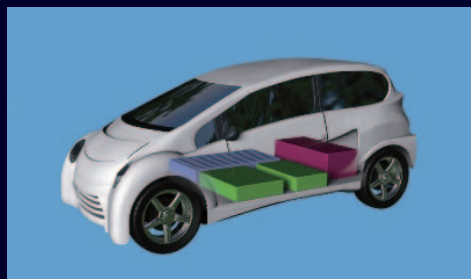
ここには 3 本のビームラインがあり、ビームは、真ん中のラインの奥や右のラインの手前にあるような四極電磁石(黄)で収束させて手前から奥に進みます。真ん中のラインは MR 本体、左側はニュートリノ施設にビームを導くためのビームラインで、MR から取り出されたビームを大きく曲げるための偏向電磁石(橙)が設置されています。右側は、MR からのビームをビームアポート(調整時などにビームを廃棄する)に導くためのビームラインです。

物質科学・生命科学の研究

物質中での原子や分子は、人間社会に例えると個々人やグループにそれぞれ対応し、その振る舞いは物質の性質と密接な関連があります。逆にいうと、原子や分子のふるまいを細かく調べれば、物質の機能を制御するための「仕組み」の深い理解につながり、また想像していなかったような新しい機能を発見することもあります。このような研究により、より高品質な材料の開発や、創薬の効率化が可能になると期待できます。

物質・生命科学実験施設 (MLF)

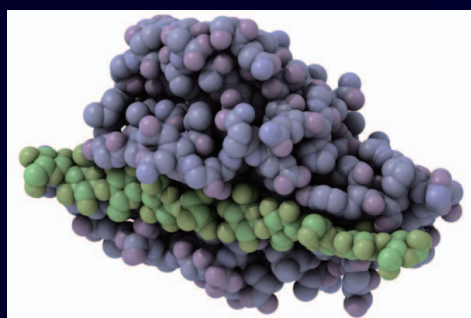
J-PARC の物質・生命科学実験施設(MLF) では、ほぼ光速(97%)まで加速した陽子を炭素、水銀の標的に衝突させることで、それぞれミュオン、中性子のビームを作り出しています。これらのビームは世界最大級の明るさで試料を照らすことができる「巨大な顕微鏡」として、科学の発展のための基礎研究から材料開発などの応用研究まで、幅広い分野の研究に用いられています。



©宮崎 NORI/Newton Press



円筒型リチウムイオン電池



酵素の一種、セルラーゼ *PcCel45A* の分子構造
 ©東京大学 大学院農学生命科学研究科
 生物材料科学専攻 森林化学研究室

MLF では世界トップレベルの中性子ビームやミュオンビームを使って、原子や分子の観察から物質・生命の起源を探る研究がなされています。

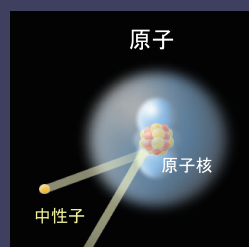
リチウムイオン電池は、携帯電話やノートパソコン、大きなものでは電気自動車にも使われ、電化の進む現代社会に不可欠な技術です。性能と安全性のさらなる向上が期待されており、MLF でも中性子やミュオンの特長を生かした研究が行われています。

電池の中で、リチウムはイオンという状態をとり、電解液という液体の中を移動することによって放電や充電が起きる仕組みになっています。しかし、電解液は燃えやすい性質も持っているため、電極が発熱すると電解液が燃えてしまうという事故が起きてしまいます。このようなことを抜本的に解決するために、燃えやすい電解質ではなく、固体を使ったリチウムイオン電池の開発が進められており、MLF でも中性子・ミュオンを使ってイオンの位置や動きを調べ、より高性能な電池材料を開発するための研究が行われています。

また、MLF では我々の体を構成しているタンパク質に関する研究も行われています。タンパク質には様々な役割がありますが、たとえば酵素も実はタンパク質でできており、鍵（酵素）と鍵穴（標的）のように結合することで標的を分解・結合させることができます。そのため、酵素が働く仕組みを解明するためには、標的に結合する様子を調べるのが重要です。

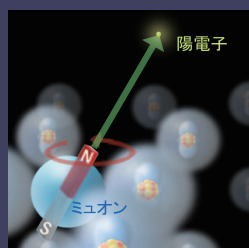
鍵である酵素はゆらゆらと動いて鍵穴に導かれた方がうまく結合するため、その動きを調べて効率的に働く酵素を推測できれば、病気の治療に繋がる薬剤の開発も期待できます。中性子を用いると、酵素と標的を色分けすることができるため、酵素がゆらゆらと動きながら標的に結合する様子をよりはっきりと識別できるというメリットがあります。

2種類のビーム



中性子で見る

中性子は原子核の中に存在する電荷を持たない粒子で、透過力が高いため物質の内部まで到達出来るという特徴があります。中性子を用いると、原子核にあたった際の飛び散り方（散乱）や、散乱した際に速度の変わる様子（分光）から、原子の位置や動きを観察できます。また、中性子が反射する様子から表面・界面の分子構造を調べたり、透過する様子から内部のレントゲン写真を撮影したりすることもできます。特にリチウムや水素などの軽元素や磁石は中性子の得意とする観察対象です。



ミュオンで見る

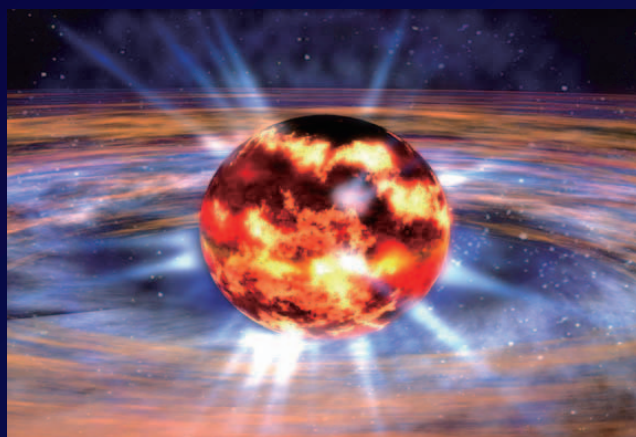
ミュオンはレプトンと呼ばれる素粒子の一種で、プラスの電荷を持つものとマイナスの電荷を持つものがあります。プラスの電荷のミュオンは水素のダミーとして振る舞い、物質中での水素の動きを調べるのに役立ちます。マイナスの電荷のミュオンで試料を照らすと内部に存在する元素の種類に応じた特殊な X 線を発するため、貴重な試料の元素組成を非破壊で分析することができます。ミュオンは磁石としての性質を持っているため、磁石材料中の磁場の強さや向きなどを調べることもできます。

素粒子・原子核研究

この宇宙に存在する物質は原子からなり、原子は原子核とその周りを回る電子から、原子核は中性子と陽子から構成されます。そして、中性子と陽子の中を探ると、最も小さな構成要素である素粒子、クォークにたどり着きます。クォークは強い力によって陽子や中性子のなかに閉じ込められていて単独で観測することはできません。一方、電子は強い力を感じない、クォークとは別タイプの素粒子レプトンの仲間でも私達にも身近な素粒子です。ニュートリノもレプトンの仲間になります。レプトンでは、電荷をもつ電子と電荷をもたないニュートリノが対を作っていますが、クォークも電荷の違う2種類が対を作っています。クォークやレプトンには、質量の違う3つの対(世代)があると分かりました。さらにこれらのクォークやレプトンには電荷が正反対の反粒子が存在します。

原子核の構造を探る

原子核を作っている陽子や中性子は、3個のクォークからなる「バリオン(重粒子)」と呼ばれる複合粒子です。一对のクォークと反クォークからなる複合粒子を「メソン(中間子)」といいます。バリオンやメソンのように、複数のクォークが強い力で結合してできた粒子を「ハドロン」といい、現在では、陽子や中性子に限らず、種類の異なるクォークの組み合わせや、クォーク間を結びつけている状態の違いなどから、たくさんのバリオンとメソンがあることが知られています。これらのハドロンを詳しく調べることで、物質の根源が何であるかという謎に迫ります。また、これらのバリオンで、ストレンジ・クォークを含む「ラムダ粒子」や「グザイ粒子」(「ハイペロン」という)は、星の進化の最終段階にあり、太陽の100兆倍以上もの密度を持つ中性子星の中心部に存在するといわれています。陽子や中性子に加え「ハイペロン」を含む「ハイパー原子核」を調べることで、中性子星の内部の構造やその成り立ちの解明も目指しています。



中性子星のイメージ ©NASA/Dana Berry

ハドロン実験施設

MRで加速された陽子ビームを金の標的にあてることによって、多種多様な二次粒子ビームを作り出します。現在は3本のビームラインが設置されており、それぞれの実験の目的にあわせて最先端かつオリジナルな検出器で、物理現象を精密に測定しています。

KURAMA スペクトロメータと美濃イベント

原子核を構成する陽子と中性子は核子と呼ばれ、核力という引力により結び付けられています。しかし核子を近づけていくと、逆に大きな反発力が働くことが知られています。ハドロン実験施設では、陽子ビームから生成した大強度K中間子ビームから通常には存在しないストレンジ・クォークを含む原子核(ハイパー原子核)を人工的に作り出し、この謎に迫る実験を行っています。ハイパー原子核などの生成は、「ビームスペクトロメータ」と「散乱粒子スペクトロメータ」によって同定されます。「散乱粒子スペクトロメータ」として、以前は、「SKS測定器」が用いられていましたが、実験の進展に伴って、現在は、写真にある「KURAMAスペクトロメータ」に変更されました。

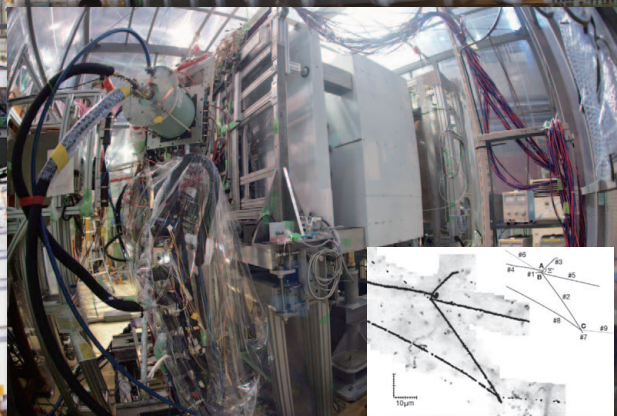
このセットアップでの実験では、両スペクトロメータでストレンジ・クォークを2つ含むグザイ粒子を同定し、原子核乾板(一種の写真フィルム)に入射してストレンジ・クォークを2つ含むハイパー原子核を探しました。写真内にある写真は、この実験で新たに発見したストレンジ・クォークを1つ含むラムダ粒子が2個入ったハイパー原子核が続いて崩壊する様子が記録された原子核乾板の写真です。この事象は「美濃イベント」と名付けられました。

KOTO実験測定器

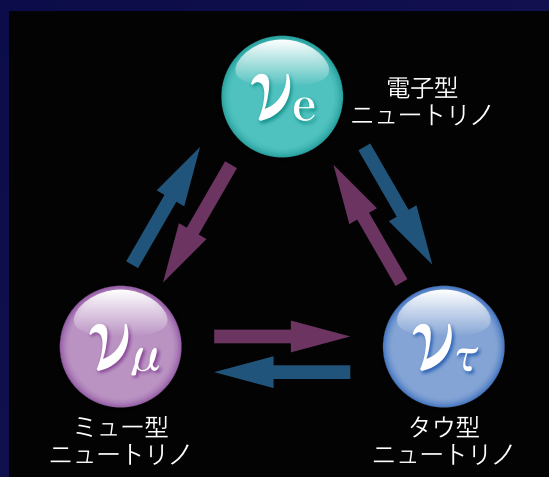
宇宙の始まりでは同じ量だけ存在していたとされる物質と反物質のうち反物質が現在は消えてしまった理由は、まだ完全に説明されていません。ハドロン実験施設では、陽子ビームが作り出す大量の中性K中間子を用いてその謎に迫る実験(KOTO実験)をおこなっています。

KOTO実験では、数百億回に一度の割合で、中性のK中間子が中性のパイ中間子と二つのニュートリノに移り変わる(崩壊する)現象を世界で初めて測定することを目指します。直径2メートルで長さ3メートルの真空槽を大型のガンマ線検出器で囲み、この崩壊を測定します。

KOTO 実験測定器



KURAMA スペクトロメータで発見された「美濃イベント」



ニュートリノ振動のイメージ



標準理論に登場する17種類の素粒子

素粒子の謎を解き明かす

宇宙の物質はバリオン（陽子や中性子）から成り立っていて、反物質（反バリオン）が見当たらないのはなぜなのでしょう。この謎に深く関わっているのが、ニュートリノという小さな素粒子であると考えられています。J-PARCでは3世代あるニュートリノが、飛行中に別の世代に変身する「ニュートリノ振動」を調べる「T2K (Tokai

to Kamioka) 実験」を行っています。T2K 実験では2013年、世界に先駆けてミュー型ニュートリノが電子型ニュートリノに変身する現象を発見しました。現在は、宇宙から反物質が消えた謎に迫るため、ニュートリノの反粒子である反ニュートリノを大量に作り出し、その振動現象を調べる実験を行っています。

ニュートリノ前置検出器

ニュートリノ実験施設

T2K 実験では、J-PARCの加速器で生み出した大量の陽子をグラファイトの標的にあてて、ニュートリノを人工的に作り出しています。このニュートリノを「前置検出器」で確認してから、295km離れた岐阜県飛騨市神岡町にある、東京大学宇宙線研究所の検出器「スーパーカミオカンデ」に飛ばし、その間の変化を観測します。

これまでにT2K 実験は、J-PARCで作り出した第2世代のミュー型ニュートリノが、飛行中に第1世代の電子型ニュートリノに変身する「電子型ニュートリノ出現現象」を観測することに世界で初めて成功しました。現在は、電磁ホーンに流す電流の向きを逆転させて、ニュートリノの反粒子である反ニュートリノビームを作りだし「反電子型ニュートリノ出現現象」を観測、前者との違いがあるかどうかを検証する実験を進めています。もしニュートリノと反ニュートリノで振動現象に差があれば、それは、ニュートリノでは粒子・反粒子の性質に違いがある（CP対称性が破れている）ことを意味しており、宇宙の創生時、私たちを作っている物質と同じように存在していたとされる反物質が現在ほとんど存在しない理由を説明する鍵になると考えられています。



T2K実験のイメージ

核変換の研究

原子力発電で発生した使用済みの核燃料には、人体に有害な影響を与えるさまざまな物質が含まれます。これらの物質を、その特性に応じて適切に処理することで、原子力発電に伴う放射性廃棄物を管理しやすくなります。

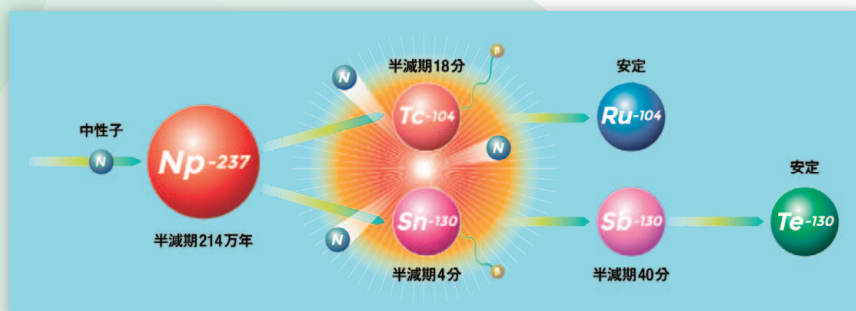
特性に応じてグループ分け（分離技術）した物質のうち、特に有害な「マイナーアクチノイド（Minor Actinide、MA）」に中性子を当てると、核分裂反応が起きて、有害度の少ない物質に変換できます（核変換技術）。

分離・核変換の後に残った物質の放射線レベルは、数百年でもとの核燃料と同じ程度にまで下がります。分離・核変換技術は、放射性廃棄物処分の有望な選択肢として、日本をはじめ世界各国で基礎的な研究開発や導入戦略が議論されている最先端の技術です。

J-PARC では、大強度の陽子加速器と MA を燃料とする原子炉を組み合わせる MA を効率的に核変換する「加速器駆動核変換システム（Accelerator-driven System、ADS）」の将来の実用化を目指し、開発研究のための実験施設を検討しています。



検討中の核変換研究のための実験施設



核変換の原理



核破碎ターゲット模擬試験装置

共同利用実験施設としてのJ-PARC

J-PARC は、大学だけでなく企業も含む、国内外の多様な分野の研究者に使ってもらうための大型実験施設です。のべ21万人日のユーザーに利用されており、その約半数が海外からのユーザーです。また、企業による利用も多く、ここ数年は年間平均70件近くの研究課題が採択されています。新専攻や分室の設置など、国内大学との連携も進めています。



国内大学との連携

先端施設を用いた大学院教育は、将来の施設創りができる人材育成に大きく貢献します。2015年に最初に分室を設置した大阪大学（左写真）に続き、多くの大学が分室を設置しました。また、茨城大学は2016年に量子線科学専攻を新設しました。J-PARCの講義と演習で、先端科学とその施設運営にダイレクトに触れる機会を次世代を担う若者に提供します。



海外研究機関との連携

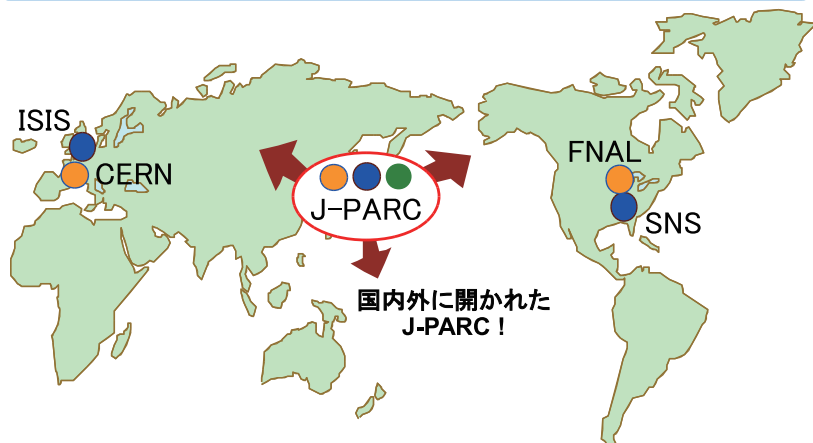
諸外国の研究機関と連携協力関係を結び、人材交流や研究交流、技術交流を進めています（写真右）。最近では、豪州 ANSTO、カナダ TRIUMF、スウェーデン ESS などと、覚書を締結／更新し、協力を深めています。

産業界との連携

先端施設のフロンティアを熟知する企業人の人材を育成する制度の整備も進めています。2016年には、住友ゴム工業株式会社と、企業に属しつつ、J-PARCのMLFにおいて新しい研究方法の開発や先導的研究を推進するフェロウシップ制度を始めました。

国際センターとしてのJ-PARC

- 物質・生命科学 : 世界三大実験施設の一つ アジア・オセアニアの中核
- 原子核素粒子物理 : K中間子実験で世界の中心
- ニュートリノ物理 : 世界をリード 三大施設の一つ



- ニュートリノのセンター ● ハドロン(K中間子)実験施設
- 中性子のセンター

CERN: 欧州合同原子核研究機構 ISIS: 英国ラザフォード・アップルトン研究所の中性子源
FNAL: 米国フェルミ国立加速器研究所 SNS: 米国オークリッジ国立研究所の中性子源

J-PARC は国際的な研究拠点として、各分野での研究をリードしています。物質・生命科学実験施設は、加速器で生成した中性子を用いて実験を行う実験施設として、イギリスのラザフォード・アップルトン研究所が持つ ISIS、アメリカのオークリッジ国立研究所が持つ SNS と並ぶ世界三大施設のひとつであり、アジア・オセアニアの中核的な研究拠点です。ハドロン実験施設で行われている原子核素粒子物理の研究も世界的レベルにあり、中でも K 中間子の研究が世界をけん引しています。また、ニュートリノ実験施設は、ヨーロッパの CERN、アメリカの FNAL と並び、加速器を使ったニュートリノ研究の世界三大研究施設のひとつです。

沿革

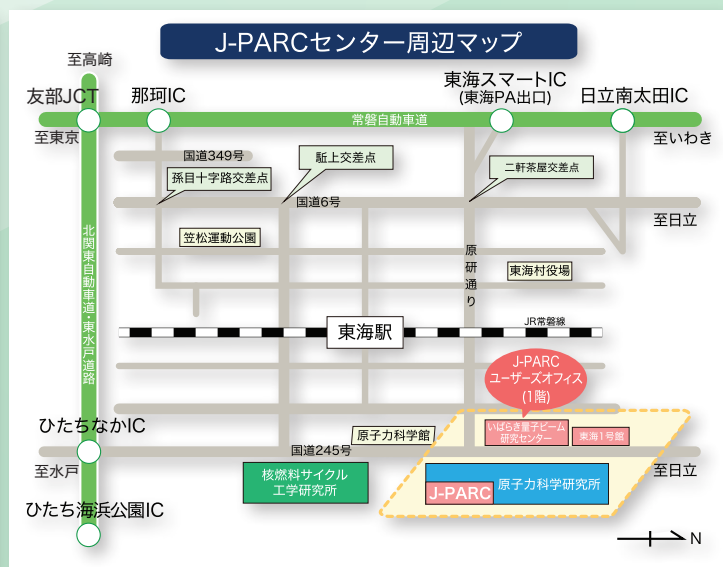
J-PARCは、日本原子力研究開発機構(JAEA)と高エネルギー加速器研究機構(KEK)との共同プロジェクトです。平成13年に両機関はJ-PARCの建設及び研究開発に関する協力協定を締結し、平成20年度には物質・生命科学実験施設で、平成21年度にはハドロン実験施設、ニュートリノ実験施設で利用運転を開始しました。現在、核変換実験施設の建設に向けた検討と技術開発を進めています。

平成13年	2001年	4月 日本原子力研究所(原研:現 JAEA)と KEK 間で、J-PARC の建設と研究開発に関する協力協定を締結 12月 J-PARC 建設開始
平成17年	2005年	8月 J-PARC の運営に関する協力協定を締結
平成18年	2006年	2月 J-PARC センター設置
平成19年	2007年	1月 リニアックで所期性能のエネルギーを達成 10月 RCS で所期性能のエネルギーを達成
平成20年	2008年	5月 MLF の中性子標的に初めてのビーム受入に成功 9月 MLF のミュオン標的に初めてのビーム受入に成功 12月 MR で当初目標のエネルギー(30GeV)を達成 12月 MLF の利用開始
平成21年	2009年	1月 ハドロン実験施設完成 3月 ニュートリノ実験施設完成 7月 J-PARC 中性子線施設が共用促進法の対象施設に指定 11月 T2K 実験前置ニュートリノ検出器でニュートリノの初観測に成功 12月 MLF で1パルス当たり世界最高強度のミュオン発生を確認
平成23年	2011年	3月 東日本大震災により停止
平成24年	2012年	1月 運転再開・ユーザー利用開始 11月 MLF で1パルス当たり世界最高強度の中性子発生を確認
平成25年	2013年	5月 ハドロン実験施設の事故
平成26年	2014年	1月 リニアックエネルギーアップグレード達成
平成27年	2015年	1月 RCS で 1MW 相当の陽子ビーム加速に成功 4月 ハドロン実験施設の利用運転を再開
平成30年	2018年	7月 RCS で 1MW 相当の陽子ビームでの連続運転に成功
平成31年/ 令和元年	2019年	9月 J-PARC10 周年記念式典・J-PARC シンポジウム 2019 開催
令和2年	2020年	4月 コロナ禍のため運転・ユーザー利用を一時停止 6月 36.5時間の 1MW 利用運転を実施 2月 ハイパーカミオカンデ計画の開始
令和3年	2021年	6月 小惑星リュウグウのサンプル、J-PARC で分析
令和4年	2022年	3月 コロナ禍を越え、海外からの利用者が2年ぶりに実験を開始

交通アクセス

常磐線「東海駅」東口よりタクシーで約10分

常磐自動車道「東海スマートIC」より約15分、「那珂IC」「日立南太田IC」より約20分 / 東水戸道路「ひたちなかIC」より約25分



J-PARC センター

〒319-1195

茨城県那珂郡東海村大字白方 2-4

TEL : 029-287-9600

FAX : 029-284-4571

<https://j-parc.jp/>



J-PARC センターユーザズオフィス

〒319-1106

茨城県那珂郡東海村白方 162-1 いばらき量子ビーム研究センター1F

TEL : 029-284-3398

FAX : 029-284-3286

<http://is.j-parc.jp/uo/>



2017年3月発行
2017年8月改訂
2019年9月改訂
2023年9月改訂